

日本三大玉露生産地における 世代更新の軌跡とライフコースの変容

和洋女子大学 家政学群 教授

佐藤 宏子

(お問い合わせ先) TEL: 047-371-2437 E-MAIL: h-sato@wayo.ac.jp



研究の背景

高齢期の家族に関する研究は、高齢社会を迎えて膨大な数に上っていますが、その多くは都市の高齢者と家族、高齢者介護に関する研究で、農業不振や後継者の結婚難に直面している中山間地域の農村家族に光を当てた研究は極めて少ないのが現状です。こうした中で本研究は、日本三大玉露茶の生産地である静岡県藤枝市岡部町において、同一の対象者と世帯を1982年から2014年の32年間にわたって追跡し、茶生産の盛衰に揺れ続けた農村家族の世代更新の軌跡と農村女性のライフコースの変容を明らかにすることを目指しています。

研究の成果

これまでに、1982年、1993年、2005年、2014年の追跡調査を実施し、239世帯の4時点パネルデータを完成しました。1982年に30～59歳だった対象者は、2014年には63～90歳になりました。そして、図1に示したように、対象者世帯のうち子や孫が結婚後に同居して対象者世代の次の世代または次の次の世代を更新した「子・孫世代更新世帯」が4割を超えました。ただし、世代更新は1993年までは活発ですが、2005年以降は停滞しており、結婚時期の遅い対象者ほど世代更新は難しくなっています。また、対象者が未婚子と同居している「更新未確定世帯」は、2005年以前は子世代の進学・就職・結婚による他出や子どもの結婚同居によって減少していますが、近年は子世代の結婚難により横ばいとなり、2014年の同居未婚子の平均年齢は46.6歳、未婚子の36.0%が50歳以上と極めて深刻な状況を示しています。さらに、子世代が他出して「夫婦のみ」また

は「単身世帯」へと移行した「更新困難世帯」は、2014年に27.6%と3割弱を占めています。

これまで農村地域では、長男夫婦による結婚当初からの一貫同居と農業経営の継承によって直系家族制が維持されてきました。しかし、本研究から中山間地域の農村家族でも子世代の大学進学・就職・結婚などによる「離家」が一般的になっており、子世代や孫世代の「帰家」（再同居）、調査地域以外への子世代の「呼び寄せ同居」が、直系家族制度の持続、直系家族の形成と世代更新を決定づけていることが明らかになりました。

今後の展望

1982年から今日までに延べ1,680人の農村女性の調査を積み重ねてきました。1980年代からの追跡研究の集大成として、日本有数の高級茶の生産を支えた女性たちの「激動の40年」をモノグラフとして残すとともに、直系家族制地域における世代更新の軌跡、帰家のメカニズム、子世代の居住歴による「親-成人子」の情緒関係の違いを解明していきたいと考えています。

関連する科研費

2013-2016年度 基盤研究(C)「中山間地域における農村女性のライフコース選択-子世代の結婚難・後継者確保難の影響」

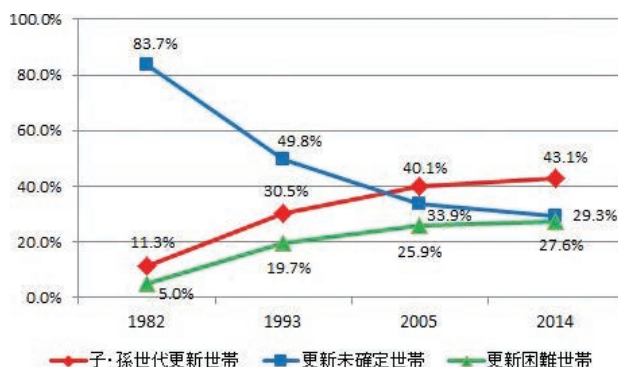


図1 農村家族239世帯の世代更新の推移



図2 「更新困難世帯」の老夫婦による新茶の収穫（静岡県藤枝市岡部町朝比奈地域）